

はぢかれて、夢にはいかり、胡麻にはよろこぶ、その心さらに定る時なし、かくて玉まつる比のいそがしさ、たまく、葎の壁にかゝりて、蛩の音にねふらんとすれば、俄に礎の槌にやとはれ、或は悵氣の鐵丁にふりまはされて、果は臺所の轉寢もわびし、ある日は大根おろしに心せかれ、ある夜は貝杓子の音に起てさまよふ、まして時雨に雪のちる比は、其汁此汁にいとまを得ず、春のはじめの雜煮より、大年の果の夕飯まで、生涯さらに五十年とは知ながら、かく摺くらすこそ口おしけれ、かゝる娑婆界をへめぐりて、賤男賤女の麴棒とならんより、今年は永平寺の會下に行て、江湖の僧を供養せば、おのづから三十棒の結縁にあひて、豁然大悟の曉にいたらざらんやと、をのが片腹を押しづりて、此心をぞ銘じ侍る、

さも、あれ世帯の夢さめて松風の音を峯に聞ゆる

〔和漢文操〕摺小木箴

仙里紅

そもく、萬物萬象の中に、摺小木といふ物ありて、目もなく、耳もなければ、龍の雲にはたらき、用ひざれば葎の壁にかゝる、玄かれば渾沌未分のかたちより、無用の用なる物といふべし、こゝに汝が生得を評せば、いら夢の日の肩をいら、けぬる、辛の時の身をなやして、利きも其日の用なれば、鈍きも其時の用ならん、こゝに汝が奉公を評せば、そも元日の雜煮より、大晦日の夜食まで、日に三度づ、躍あるき、白みそによるこび、赤みそにいかりて、あたまのはげるもおぼえずや、されど深山木のそだちなれば、松の一ふしのそくさいにて、たとひ留守の戸の隙なるも、そこにぶらつきて横寢はせず、こゝに汝が名聞を評せば、霜月の廿三日には、大師講とてあづき粥をそなへ、其日の雪を摺小木がくしといへば、雲母坂の明ぼのに誰まことより、ちらつきて、嘘もあらしのあれぬ時なし、誠やその祖師の片輪なるより、其脚のあとをかくさむとて、をのが憂名にかへたるよし、佛縁はいとたふとしや、さはれど人間の脚を摺小木にして、師走の坂を越